プリュケによる『孟子』受容とその特徴について

佐藤麻衣

はじめに

本研究は、ヨーロッパにおける『孟子』受容の実情とその意義を検討することを目的とする。ここで注目されるのは、清代の宣教師たちが「四書」を解釈する際に、明代の宰相、文教行政の長であった張居正（一五二五～一五八二）の注釈を重視し、訳文の基礎として依拠していたことである。そこで、張居正の著である『四書直解』中の『孟子直解』[1]を通して、ヨーロッパにおける『孟子』受容の様相を考察しようと思う。

その性善説・革命説などの内容から、イエズス会士たちに忌避される要素を含んでいた『孟子』だが、ベルギー人イエズス会士のフランソワ・ノエル（一六五一～一七二九）の著である『中華帝国の六古典』[2]において、遂にラテン語に翻訳される。そして、それは『孟子』を含む「四書」の欧文全訳が初めてヨーロッパに紹介されたものであった。さらに、張居正の注釈に大きく依拠したノエルの『中華帝国の六古典』は、後にコレージュ・ド・フランスの教授であったフランス人神父のプリュケ（一七一六～一七九〇）の著『中華帝国経典』[3]によって、フランス語に抄訳された。このプリュケには、フランス百科全書派と交流していたという注目すべき事実があった。つまり、張居正注釈に立脚したノエル訳文とその解釈が、プリュケを経由して百科全書派のみならず、フランス革命に何等かの影響を与えた可能性があることを推定できるのである。

書物の存在という点から、中国哲学、とりわけ儒教の情報が張居正注釈を通じてヨーロッパに流入していた実態は明らかである。そこで、張居正注釈を踏まえたノエル『孟子』訳文とその解釈の、百科全書派やフランス革命への関与までを見通せば、ヨーロッパにおける『孟子』受容の様

相を、とりわけ政治思想・政治状況などの方面から考察する必要が生じてくる。

ところで、筆者はさきに『日本中国学会報』第六十六集所載の拙稿「張居正『孟子』解釈とヨーロッパにおける受容について」[4]（以下、拙稿と略記）で、孟子の「革命論」を中心に張居正やノエルの解釈を確認し、最後に、ヨーロッパにおける『孟子』受容が延いてはフランス革命にまでつながっていた可能性について示唆した。そこで、本論では、張居正『孟子』解釈のヨーロッパ流入の実情を検討する初歩的作業として、プリュケの手に成る訳書『中華帝国経典』と、ならびに儒教の徳治主義を解説した同書付載の「儒教大観」[5]を資料として、『孟子』受容とその特徴を概観しておきたいと思う。

第一章　プリュケ『孟子』受容と「儒教大観」との関連性について

プリュケ『中華帝国経典』では、その最初に「儒教大観」が収録されている。先行研究では、まず後藤末雄によれば、その内容は儒教を体系的に叙述したものであり[6]、ノエル『中華帝国の六古典』の解説として著されたという[7]。また市川本太郎は、後藤末雄訳『儒教大観』を引用し、中国経世家の戦争観に関するプリュケの解説は、孟子の戦争観とまさに同一であると論じている[8]。したがって、ヨーロッパにおける『孟子』受容の全体像をより明確化するためには、『中華帝国経典』のみならず、ならびにとりわけ儒教を考察の中心に据える「儒教大観」を検討し、プリュケによる『孟子』受容の全貌を捉える必要があるといえる。

そこで、ここではこれらの先行研究と前掲拙稿での考察を踏まえつつ、以下、梁恵王下「革命論」・万章下「君主の廃位[9]」についての部分に関するプリュケ『孟子』受容とその特徴を、『中華帝国経典』中の『孟子』訳文と、論考「儒教大観」を参照しながら考察したい。

（一）『孟子』梁恵王下における「革命論」

まず、『孟子』梁恵王下の本文を示す。

齊宣王問曰、湯放桀、武王伐紂。有諸。孟子對曰、於傳有之。曰、臣弑其君可乎。曰、賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘。殘賊之人、謂之一夫。聞誅一夫紂矣。未聞弑君也。（『孟子』梁恵王下）

この章は、斉の宣王が「湯武革命」についての事実を孟子に確認し、孟子がそれに対して「革命」を認めるような回答をするという内容である。孟子のこの部分は、古来、禅譲と放伐という王朝交代の二つの姿のうち、ともすれば

否定されがちな暴力に基づく放伐を孟子が是認していることで有名な一段である。

すでに先行研究によって明らかにされているのは、張居正が「革命」[10]やその当事者とされる「武王」を肯定的に捉えていたこと、また、ノエルは暴虐である君主の支配権を剥奪することを、張居正や朱子以上に積極的に肯定していたことである。[11]では、プリュケはどのように『孟子』における「革命」や「武王」評を受容したのか。以下、対応するプリュケ訳を分析していく。

最初に、本文「齊宣王問曰、湯放桀、武王伐紂、有諸」に対応するプリュケ訳を示す。

〔斉の〕宣王が話を変え、そして言う「成湯 Chin-Tam 王が帝王桀 Kié を打ち破ったあと、彼〔桀〕を国外へ追放した。そして六ヶ月 six mois 後にその流亡の地で彼は死んだという。同様に文王 Ven-Vam が帝王紂 Cheu を攻撃し、そして撃破したという。それは本当か」と。(『中華帝国経典』「孟子」第一巻、八二頁)

まずノエル訳には、桀が配所「南巣」で「三年後」(『中華帝国の六古典』「孟子」二三九頁)に死亡したとあるが、プリュケは「六ヶ月後」として、死去までの時間を六分の一にまで短縮している。このことからも、プリュケが暴君の死という結末を早めて訳している可能性が考えられる。

また『孟子』本文、『直解』、ノエル訳においても、「紂」を攻撃した者は「武王」であると明確に記されている。にもかかわらず、それに対して、プリュケはそれを「文王」だと表記する。つまり、「武王と文王の置換」という作為的な操作がプリュケ訳には見受けられるのである。ただ、これでは「君臣の義」によって称された文王にも、臣下が君主を弑(しい)するという「伐」による「革命」の意志があったことを認めることとなる。伝統的な殷周革命理解の要点である、文王は紂王に対して臣下としての礼儀を失することはなかったという構図を、完全に否定しているのである。では、なぜプリュケはこのような文・武の置換を行ったのか。実は、この梁恵王下以外にも、プリュケによる文・武の置換は複数存在する。それらは第二章において後述する。

続いて、本文「孟子對曰、於傳有之。曰、臣弑其君可乎」に対応するプリュケ訳を示す。

「その帝王たちの年代記〔尚書〕や、何人もの他の歴史家たちがそう断言する」と孟子が言う。「しかしながら、帝王桀Kiéや帝王紂 Cheu は本当の帝王〔主君〕たちであったし、成湯 Chin-Tam は文王 Ven-Vam 同様、封臣〔臣下〕でしかなかった。〔そうであるなら

ば、〕彼らはその帝王に戦いを挑み、そして〔革命によって〕王位を剥奪して détrôner もよいのか」と〔斉の〕宣王 Si-Ven-Vam[12] が言う。（『中華帝国経典』「孟子」第一巻、八二頁）

ここで、『直解』には「以臣弑君、於理可乎」（『孟子直解』梁恵王下）とあり、ノエル訳には「自分の主君を脅かしたり、殺したりすること〔弑〕が許されるのだろうか[13]」（『中華帝国の六古典』二三九頁）とあるところを、対応するプリュケ訳では、臣下が主君を殺す意の「弑」よりも、むしろ弑することの目的である「王位を剥奪する」ことの可否確認の方を強調している傾向がある。

最後に、本文「曰、賊仁者謂之賊。賊義者謂之殘。殘賊之人謂之一夫。聞誅一夫紂矣。未聞弑君也」に対応するプリュケ訳を示す。プリュケ訳が王の失政の箇所を訳出する場合、そこには『孟子』に登場する桀紂を透過して、ルイ王政が見えてくる。

孟子が言う「帝王や王は、哀れみ〔「仁」〕piété や公正〔「義」〕équité によってその帝国や王国を統治するために設定されたのだ。もし非人間的な帝王が哀れみ〔「仁」〕の感情〔感覚〕のすべてを欠いたならば、彼は帝国の災禍〔害毒〕fléau であり悪党〔強盗〕〔「賊」〕brigand である。もし貪欲で、彼が人間性のすべてを放棄するならば、彼は帝国の破壊者〔「殘」〕destructeur である。さて帝国の災禍であり破壊者である者は、もはや帝王とはみなされず、そうではなくて〔一人の〕私人 particulier である。それ故、私は常に紂Cheuと呼ばれる〔一人の〕私人が文王 Ven-Vam によって死刑にされたとは聞いているが、帝王紂がその臣下の文王によって処刑されたという話は一度も聞いていない」と。（『中華帝国経典』「孟子」第一巻、八二―八三頁）

ここで、『孟子』本文「賊仁者謂之賊」（『孟子』梁恵王下）を、張居正は朱子『集注』に拠って[14]、「惟害仁之人、其存心凶暴淫虐、滅絶天理、故謂賊之人」（『孟子直解』梁恵王下）と記す。また、この張居正の「其の心を存すること凶暴淫虐にして、天理を滅絶す」（『孟子直解』梁恵王下）を、ノエル訳では「君主の面汚し、あるいは略奪者〔「賊」〕」（『中華帝国の六古典』二三九頁）としていた。これに対応するプリュケ訳を見ると、仁を害する君主の罪禍の害を重大視し、国の災害であり、断罪すべき対象であると極言しているといえる。

また、ここでもはっきりと「紂」が「文王」によって処

刑されたと明言しており、本来「武王」と記されてきたところが「文王」であるとはっきり書き換えられている。このプリュケ訳に基づく限り、聖徳有る君主によって仁を害する君主は断罪されるべきであること、そして「文王」によってそれがなされたのだというように、プリュケが捉えていたことは明白であろう。

ところで、このような「革命」を是認する『孟子』解釈を受容したプリュケは、儒教の徳治主義の枠組の中ではどのように「革命」を説明したのか。このことについて「儒教大観」では、「革命」の前提が次のように説かれる。

「国王が不善と不徳を重ね、不義不正を事とすれば遂に悪政の百出を見るのである。国民は此の悪政を論拠として、国王が国父の慈愛を棄てて国民の敵たる感情を持つに至ったと判断し、更にこの国王が残虐無道な暴君の精神に支配されていることを認識するの已むなきに至るのである。そして徳治主義を基礎として建設された国家はこの時こそ革命を経験するのである。[15]」（『中華帝国経典』「儒教大観」二二四頁）

このように、『孟子』を受容したプリュケは、「儒教大観」において、儒教の徳治主義に依拠する限り「革命」は是認されるのだと解釈し、それを明確に示していたのである。

（二）『孟子』万章下における「君主の廃位」

まず、『孟子』万章下の本文を示す。

齊宣王問卿。孟子曰、王何卿之問也。王曰、卿不同乎。曰、不同。有貴戚之卿、有異姓之卿。王曰、請問貴戚之卿。曰、君有大過則諫。反覆之而不聽、則易位。王勃然變乎色。曰、王、勿異也。王問臣。臣不敢不以正對。王色定、然後請問異姓之卿。曰、君有過、則諫、反覆之而不聽、則去。（『孟子』万章下）

この章は、斉の宣王が諸侯の政治にあずかる大臣「卿」の職分について尋ね、孟子が王と同姓の卿と異姓の卿に区別して説明した内容である。

対応するプリュケ訳を示す。

孟子が言う。「さて、もし王が重大な過失に陥り、彼がその悪徳や暴政〔専制〕によって善き統治を転覆させるのであれば、首相 premier ministre が単刀直入に〔回り道なしに〕sans détour、そして率直に〔隠し立てなしに〕sans déguisement、その無秩序を知らせ〔注意し〕なければならない。もしこの最初の警告の効果がなければ、彼〔卿〕は定まった第二、第三〔の警告〕をしなければならない。最後に、彼〔王〕がその意見のすべてに耳を貸さず、その過失に頑固・執拗

にとどまるのならば、王国全体の崩壊を阻止するために、王の親族のうちで、その英知や美徳〔徳〕に優れた〔卓越した〕人を選ばなければならず、そして彼〔首相〕はその人を即位させ、悪王 mauvais roi に置きかえるべきである」と。(『中華帝国経典』「孟子」第二巻、九八―九九頁)

ここで、対応するノエル訳の「最初の警告」「第二、第三の警告」「再三の警告」(『中華帝国の六古典』三九七頁)といった表現は、『孟子』本文の「反覆之」(『孟子』万章下)を受けた張居正の「反覆規諫」(『孟子直解』万章下)を根拠としており、君主に対する執拗な警告と受け取り訳出したものであった。一方、プリュケ訳はほぼノエル訳に依拠した内容ではあるが、王に対して臣下が直言する際の態度として、「単刀直入に〔回り道なしに〕、そして率直に〔隠し立てなしに〕、その無秩序を知らせ〔注意し〕なければならない」という説明が新たに加えられている。すなわち、臣下の率直さや誠実さの必要性をより強調した解釈となっており、それが「反覆規諫」の重要性を主張するものとなっている。

また、ノエル訳は、王と同姓の卿がその君を廃して同族の他の者を立てる場合、過失ある君主を「罪人」(『中華帝国の六古典』三九七頁)であると厳粛に断罪している。これは朱子や張居正にも見受けられないノエルの独自性であり、支配者に対するあからさまな批判となり、暴君の権威剥奪を積極的に肯定している。プリュケ訳では、こうしたノエル訳を受け、罪ある君主を端的に「悪王」(『中華帝国経典』「孟子」第二巻、九九頁)であると極言する。つまり、先に梁恵王下で見た「一人の私人」の延長にある「罪人」としてではなく、あくまでも「王」として処罰すべき対象であると認識していたための批判である。他方、プリュケはその梁恵王下において、すでに、臣下が主君を殺す「弑」よりも、弑する目的である「王位剥奪」の可否の方を強調する解釈をしていた。すなわち、プリュケにとっての主眼は、天下の王が有徳であるか否かにあり、逆に仁を害する「王」の廃位などといったものは、必然・当然のこととしてより厳格に捉えられるのである。

では、このような『孟子』解釈に基づき、プリュケは儒教の徳治主義に関連付けてどのように「君主の廃位」を説明するのか。「儒教大観」には次のようにある。

「もし皇帝が国民の反対を無視して、飽くまで権力を濫用するならば、国民は国家の慈父たる願ひを棄てて、暴君にならうとする皇帝の意志を明らかに認めていた。

其時こそ、国民は皇帝に対する服従を中止するのであった。この際、国民は皇弟を王位に据えるか、若くは圧制政治の発展を阻止するために、最も熱誠と勇気と識見とを披瀝した高徳の君子を選んで、之を王位に即けたのであった。[16]」（『中華帝国経典』「儒教大観」一〇九―一一〇頁）

このように、すでに見た『孟子』万章下の内容と非常によく対応しているが、暴君を廃位した後、「皇弟」か「最も熱誠と勇気と識見とを披瀝した高徳の君子」を王位に据えるとしている点が異なる。したがって、プリュケの観る儒教と徳治主義からすれば、王の親族だけでなく、高徳の君子であれば王位に就くことができることになる。このように、プリュケはノエル訳―延いては張居正注釈―を通して『孟子』を受容しながらも、行為者が「有徳」であるか否かが廃立の要件として判断の基準となるという自身の考えを、その解釈に反映させていたことがわかる。

第二章　プリュケによる文王と武王の置換について

前述したように、プリュケ『中華帝国経典』における『孟子』訳では、「文王」と「武王」の置換が存在する章がある。まず、先の梁恵王下の一箇所以外に、離婁上に一箇所、尽心下に二箇所存在する。[17] これら文・武の置換の特徴から、その背景にあったであろうプリュケの意図が垣間見える。一つは、「文王」の時にすでに天下の王となるべき天命が与えられていたことの強調である。[18] もう一つは、その聖主「文王」の徳を継ぎ道を得た「武王」と合わせ、文・武の二代をもって暴君紂を伐ったと訳すことで、聖徳有る者による「革命」の限りない正当性へとつなげるということである。

そこで、具体的に『孟子』の離婁上と尽心下における文・武の置換を確認していく。

（一）『孟子』離婁上における文・武の置換

まず、『孟子』離婁上の本文を示す。

孟子曰、桀紂之失天下也、失其民也。失其民者、失其心也。得天下有道。得其民、斯得天下矣。得其民有道。得其心、斯得民矣。得其心有道。所欲與之聚之、所惡勿施爾也。民之歸仁也、猶水之就下、獸之走壙也。故爲淵敺魚者、獺也。爲叢敺爵者、鸇也。爲湯武敺民者、桀與紂也。今天下之君有好仁者、則諸侯皆爲之敺矣。雖欲無王、不可得已。今之欲王者、猶七年之病求三年之艾也。苟爲不畜、終身不得。苟不志於仁、終身憂辱、以陥於死亡。詩云、其何能淑。載胥及溺。此之謂也。

（『孟子』離婁上）

この章では、魚を淵へ追いやるのは獺であり、雀を草むらへ追いやるのは隼であるように、仁政によって民心を得た湯王や武王の方へ民を追い立てるのは、暴政によって人民を虐げる桀王や紂王であるのだということが説かれている。また、孟子の思想においては、民心を得る者こそが天下を得るのだということを明示する重要な章でもある。

次に、本文「爲湯武敺民者、桀與紂也」に対応する『直解』を示す。

至于湯・武之仁、本是人心之所歸向。而桀・紂之爲君、又暴虐無道、百姓不得安生。把夏・商之民都逼逐將去、使之歸於湯・武。就似魚之歸淵、雀之歸叢一般。是湯・武之所以得民者、桀・紂、爲之敺也。（『孟子直解』離婁上）

（湯・武の仁に至るは、本と是れ人心の帰向する所なり。而れども桀・紂の君為るは、又た暴虐無道にして、百姓の生を安んずることを得ず。夏・商の民を把りて都て逼逐し将去き、之をして湯・武に帰せしむ。就ち魚の淵に帰し、雀の叢に帰するに似て一般なり。是れ湯・武の民を得る所以の者は、桀・紂、之が為に敺なり。）

このように、桀王・紂王の暴虐無道によって、人民の生活は脅かされて安心できず、天下の民心が湯王・武王に帰したと、張居正は述べている。

ここで、対応するノエル訳を確認すると、「〔前文省略〕；〔弱肉強食の自然界における〕ように、かつて残酷な帝王桀 *Kie* や紂 *Cheu* は、彼らの冷酷さや不公平さによって人民たちを恐怖に駆りたて、〔人民たちは〕あたかも避難所や安全な場所であるかのように、慈悲深き王の成湯 *Chim Tam* や武王 *Vu Vam* のそばへ逃げ込んだ。」（『中華帝国の六古典』「孟子」三三五頁）とある。ノエル訳は張居正注に依拠[19]し、桀や紂の暴政を具体的に示している。また、張注における「百姓不得安生」（『孟子直解』離婁上）から、「安んずる」ことを「避難所や安全な場所」という形で受容し、人民たちの安心や安定をより具体的に訳している。

以下、対応するプリュケ訳を示す。

〔前文省略〕：〔弱肉強食の自然界における〕ように、残忍な帝王桀Kié-と紂Cheuは、人民たちすべての心を〔激しい〕恐怖に陥れ、彼ら〔人民〕をいや応なしに成湯 Chin-Tam や文王 Ven-Vam のまわりに亡命〔避難所〕のように集結させるのが見られた。（『中華帝国経典』「孟子」第二巻、二六頁）

プリュケ訳はノエル訳にほぼ依拠しており、ノエル訳で見られた「安んずる」の解釈も反映されている。しかし、前述したようにプリュケ訳では文・武の置換が見られ、ここでは桀・紂の暴政に恐怖し、人民が帰した先は「湯王と武王」ではなく、「湯王と文王」の所になっている。したがって、ここでもプリュケによる意図的な置換がうかがえる。

ところで、『中華帝国経典』における『孟子』では、いくつかの章の省略が見られる。プリュケは、この離婁上の章の後にある三章を省き、天下の「大老」「父」と称される伯夷や太公望が、「紂」を避けて「文王」に帰服した、という内容の章へストレートにつながる構成となっている。[20] これによるなら、民心を失った「紂王」と、逆に民心を得た「文王」という対照的な構図がより鮮明になる。このように、プリュケ訳による文・武の置換に基づけば、民心を得た徳高き「文王」が天命を受け、自ら紂王を放伐して天下を得るという説明になる。これにより、「紂」との関係において有徳者「文王」を極端まで際立たせる訳文になり、結果的に「革命」の正当性をより強調させることにつながっているのである。

（二）『孟子』尽心下における文・武の置換（その一）

続いて、尽心下を二章確認していく。まず、一つ目の『孟子』尽心下の本文を示す。ここでのプリュケ訳は、上述の置換とは反対に文王から武王への置換が見られる。

貉稽曰、稽大不理於口。孟子曰、無傷也。士憎茲多口。詩云、憂心悄悄、慍于羣小、孔子也。肆不殄厥慍、亦不隕厥問、文王也。（『孟子』尽心下）

この章は、『詩経』を引用して、「孔子」や「文王」であっても人から誹られることがあるとするものである。よって、引用している『詩経』の内容からも、「武王」でないことは明らかである。

次に、本文「肆不殄厥慍、亦不隕厥問、文王也」に対応する『直解』を示す。

試把自古兩箇聖人憎[21]茲多口的來説。孔子、聖人也。……文王、聖人也。……夫以文王・孔子之聖、而多口且如此。（『孟子直解』尽心下）

（試みに古（いにしえ）自り両箇の聖人の増茲（ますますここ）に多口なる的（もの）を把（と）り来たりて説く。孔子は、聖人なり。……文王は、聖人なり。……夫（そ）れ文王・孔子の聖を以てするも、而れども多口且つ此の如し。）

張居正は、孔子と文王が聖人であることを強調し、その二者の聖徳をもってしても、多くの人からの誹謗中傷に遭

うものであることを示している。

対応するノエル訳を確認すると、「あなたは最も賢明な孔子と最も傑出した文王 *Ven Uam* を顧みよ。」（『中華帝国の六古典』「孟子」四六一頁）とある。ノエル訳では、聖人である孔子や文王を賛美し、その具体例に注目すべきであることを強調している。

以下、対応するプリュケ訳を示す。

あなたたちは、この孔子 Confucius と武王 Vu-Vam における信実という、二つの偉大な範例〔見本〕を見るだろう。（『中華帝国経典』「孟子」第二巻、二五〇頁）

プリュケ訳では、ノエル訳で見られた賛美を承け、二つの偉大な見本として、その具体例による説得力と信憑性を高めている。ただし、ここでは文・武の置換により、その偉大な見本は「文王」ではなく「武王」ということにされている。

ここで、わざわざ文王から武王に置換する意図がプリュケにあるとすれば、聖人と称されながらも論者から批判を受けることがしばしばあり、文王と差別されてきた「武王」に対する弁護になっている可能性が考えられる。そうであれば、恐らくプリュケは儒教における「文王」と「武王」の評価の差をよく理解しており、ここでの文・武の置換は「武王」に対して強く後押しするものとなっている。[22] プリュケ訳に従えば、「武王」を「孔子」とともに並立させ、二つの偉大な範例として説く以上、批判される「革命」の当事者「武王」を聖徳有る者として高く称揚し、「文王」と同様その行為を正当化させることを企図していたといえるだろう。

（三）『孟子』尽心下における文・武の置換（その二）

最後に、二つ目の尽心下の章を確認する。まず、『孟子』尽心下の本文を示す。

孟子曰、由堯舜至於湯、五百有餘歳。若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之。由湯至於文王、五百有餘歳。若伊尹・萊朱、則見而知之、若文王、則聞而知之。由文王至於孔子、五百有餘歳。若太公望・散宜生、則見而知之、若孔子、則聞而知之。由孔子而來、至於今、百有餘歳。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾。（『孟子』尽心下）

この章は、堯・舜から湯王までの五百年、湯王から文王までの五百年、文王から孔子までの五百年を、聖人が出現する五百年周期であるとするとともに、聖人の徳を見聞きして受け継いでいくという道統の思想を確認する上でも重

要な内容となっている。

次に、本文の前半部分に対応する張居正『直解』を示す。

湯得聞堯舜之道、固於禹・皐陶有賴矣。由湯之時、歴數以至于文王、計其時亦五百有餘歳。文王出、而成湯之道統始有所傳、亦非文王生而能知成湯之道也……文王得統於湯、固於伊尹・萊朱、有賴矣。由文王之時、歴數之以至于孔子、[23] 計其時亦五百有餘歳。孔子生、而文王之道統、斯[24]有所傳、孔子亦非無自而得統於文王也。

（『孟子直解』尽心下）

（湯は堯舜の道を聞くを得るも、固より禹・皐陶に於いて頼ること有り。湯の時由り、歴数以て文王に至り、其の時を計るも亦た五百有余歳。文王出でて、成湯の道統の始めて伝わる所有るも、亦た文王生まれて能く成湯の道を知るに非ざるなり。……文王統を湯に得るも、固より伊尹・莱朱に於いて頼ること有り。文王の時由り、歴数の以て孔子に至り、其の時を計るも亦た五百有余歳。孔子生まれて、文王の道統始めて伝わる所有り。孔子も亦た自らにして統を文王に得ること無きに非ざるなり。）

張居正は、堯・舜から湯王、湯王から文王、文王から孔子にその徳がどのように受け継がれてきたのか具体的に説明し、「群聖相承之統」（『孟子直解』尽心下）の途絶えたことがないことを強調する。

ここで、対応するノエル訳を確認すると、「〔堯舜に〕次いで、帝王成湯から絶えず文王 *Ven Uam* まで、さらにおよそ五百年を数える。……続いて、文王 *Ven Uam* から絶えず孔子まで、再びおよそ五百年を数える。」（『中華帝国の六古典』「孟子」四七二頁）とある。ノエル訳でも、歴代の聖人が出現する五百年周期と、その道統が五百年の間で途絶えることがなかったことを示している。

以下、対応するプリュケ訳を示す。

成湯 Chim-Tam から武王 Vu-Vam まで数えて再び約五百年、そして武王 Vu-Vam から孔子 Confucius まで五百年を数え、その教義が学ばれ、それを伝承してきたのだ。（『中華帝国経典』「孟子」第二巻、二六六頁）

プリュケ訳はノエル訳に依拠し、聖人出現の周期を五百年であるとして、断絶なき道統の継続性を明記している。また、ここでもプリュケによる文・武の置換が確認できる。それによって、「湯王から武王」まで約五百年として、聖人の周期の中にしっかりと「武王」を収めているのである。プリュケが、「文王」と「武王」の二代によって殷を倒したと訳したのは、人民の幸福を配慮しての行為だったと解

釈・主張したかったためであろう。そこから、「武王」と先行する聖人との優劣の差を無くし、道統の内に組み込むことは必須の作業だったと思われる。『孟子』の最終章に位置するこの尽心下の章において、「武王」をその道統上にかたく措定し、「孔子」がその道を受け継いだとすることで、批判する余地の無い有徳者「武王」像をプリュケは示そうとしたのである。

以上確認してきたように、やはりこれら文・武の置換は、延いては「革命」の限りない正当化へとつなげるための、プリュケによる意図的作業であったと推測できるのである。

まとめ

以上、とくにプリュケがことさらに武王から文王への置換を行った箇所などで、「文王」に「革命」の意志があったと受け止めさせ、他の置換に見られたように、その文王の意志を受け継いだ「武王」をも有徳者としてより肯定的に捉えられるように意図的に訳出が行われていると思われる。

また、そうした解釈の淵源・誘因として、張居正が「革命」やその当事者とされる「武王」を肯定的に捉え、「湯・武」の差別化を除き、「武王」を歴代の聖人たちと同列化する解釈があったのは事実であろう。かてて加えて張居正によるそのような姿勢はノエルによって好意的に受容されていた。恐らく、先行する時代にこのような解釈傾向があったからこそ、プリュケは、その評価に優劣の差異があった「文王」と「武王」を置換しやすくなったのではなかろうか。さらに、「文・武の置換」は、聖人「武王」の擁護だけでなく、同時に徳高き「文王」をより引き立たせる効果にもつながっていた。これらによってプリュケは、民心を得て天命を受けた有徳者であるなら、臣下の君主に対する「伐」による「革命」も可能であることを、儒教の徳治主義からはっきりと是認しようとしたといえよう。

そして、このような性格を内包したプリュケ著書が、まさにフランス革命直前に出版されていたことを考慮すれば、『孟子』の思想がフランス革命人士に歓迎され、また利用されたであろうことが想定できる。よって、その糸口の究明については今後の課題とする。

注

(1) 本論では、イエズス会士たちが在華した時代に鑑みて、清代刊行の『四書直解』(『四書集註闡微直解』清八旗経正書院刻本『四庫未収書輯刊』第二輯第十二冊、北京出版社、

二〇〇〇）を張居正の注釈の底本とした。ただ、文字の異同を確認するため必要に応じて『孟子経筵直解』（『江戸幕府刊行物集成』「四書経筵直解」元禄元刊）や、『張居正講評〈孟子〉』（上海辞書出版社、二〇〇七）を参照した。

（2）Noël, Francisco., *Sinensis Imperii Libri Classici Sex*, Pragae, 1711.

（3）François-André-Adrien Pluquet, *Les Livres classiques de l'Empire de la Chine*, Paris, 1784-86.

（4）拙稿「張居正『孟子』解釈とヨーロッパにおける受容について」（『日本中国学会報』第六十六集、二〇一四年）を参照。

（5）Pluquet, "*Observations sur la philosophie morale et politique des législateurs chinois*" *Les Livres classiques de l'Empire de la Chine*, Paris, 1784.

（6）後藤末雄訳『儒教大観』（第一書房、一九三五）四七頁。

（7）後藤末雄『中国思想のフランス西漸2』（平凡社、一九六九）五頁。

（8）市川本太郎『孟子之綜合的研究』（信州大学教育学部内市川先生記念会、一九七四）四二九頁では、後藤末雄訳『儒教大観』一二四頁の内容を引用し論評している。

（9）前掲注4拙稿の第一章（一）（三）のタイトルを参照。

（10）前掲注4拙稿を参照。

（11）井川義次『宋学の西遷―近代啓蒙への道―』（人文書院、二〇一〇）三三〇―三三一頁を参照。

（12）「〔斉の〕宣王 Si-Ven-Vam」は、ノエル訳では「〔斉の〕宣王 Siuen Vam」とある。

（13）前掲注11に同じ。

（14）『孟子集注』には、「害仁者、凶暴淫虐、滅絶天理。故謂之賊。」（『孟子集注』梁恵王下）とある。

（15）前掲注6後藤訳書、一五四頁。

（16）前掲注6後藤訳書、一〇三頁。

（17）また、『中華帝国経典』では『孟子』訳以外にも文・武の置換があり、『大学』訳で一箇所、『論語』訳では泰伯篇に一箇所存在する。

（18）文・武の置換が見られたプリュケ『大学』訳の該当箇所は、『書経』「康誥」と、『詩経』「大雅」文王篇の内容に関連している。また、『書経』「康誥」には「天乃大命文王、殪戎殷、誕受厥命」とあり、『詩経』「大雅」文王之什の諸篇では、文王篇を含め、民意に応じて天命が降ったのは文王の時からであることが示されている。恐らくは、プリュケがこれらを尊重して翻訳を行った可能性があり、後考したい。

（19）朱子注には「言民之所以去此、以其所欲在彼而所畏在此也」（『孟子集注』離婁上）とあるのみである。

（20）『孟子』の章数は、『孟子集注』の分章によった。

（21）『孟子経筵直解』は「増」に作る。張注には「憎字當作増字、是増益的意思」（『孟子直解』尽心下）とある。よって、ここでは「増」とした。

（22）文・武の置換が見られたプリュケ『論語』訳の該当箇所は、

「文王」に二心なく、臣下としての忠節を守ったことから、「泰伯」と並んで孔子に「至徳」と称され、将来、実力行使した「武王」とその優劣評価が分かれる論拠となる重要な章である。恐らくプリュケは、儒教において「文王」と「武王」の評価に差があることを踏まえ、その特に重要な『論語』の章において文・武の置換を行ったと思われる。

(23)『孟子経筵直解』は「歴」に作る。ここでは「歴」によった。

(24)『孟子経筵直解』は「始」に作る。ここでは「始」によった。